

12年続くジャガイモ収穫交流会

農委会が保育所園庭で畑づくり

鳥取・日野町 農業委員会・ひのっこ保育所



①収穫を喜ぶ園児と委員、②土の中から現れたイモを取り上げる



【鳥取】日野町で7月18日、日野町農業委員会(長住武美会長)と同町のひのっこ保育所(稲田いずみ所長)の園児とのジャガイモ収穫交流会が行われた。交流会は子どもたちに土とふれあい、農業をより身近に感じ、食の安全を学んでもらうことを目的に12年前から毎年開催している。前年から毎年開催している。畑は園庭の一角にあり、園児たちは日々の水やりなどをおして、成長の様子を

観察した。山間部にある同町では、園庭の畑にもかかわらず鳥獣の被害があるため、園児は委員が被害防止のネットを張ってくれていることも見ており、食べものが収穫されるまでには多くの人が手塩にかけて育ててくれることを感じながら、収穫の日を楽しみにしていた。委員が鋏を入れるとゴロゴロとジャガイモが現れ、園児は競争するかのようワイワイと楽しみながら収穫した。今年は少し小ぶりな出来だったが、バケツ6杯分が収穫できた。

大分・別府市 別府温泉フルーツファーム 温泉熱で南国フルーツ育て

バナナの通年出荷に成功



【大分】別府市湯山の別府温泉フルーツファーム(蒼生産業㈱)は、温泉の蒸気熱を活用し、バナナの通年出荷に成功した。2015年から栽培に着手して試行錯誤した結果、2年前から主力のバナナの通年出荷に成功した。24年には、同市の主要観光スポットの鉄輪いでゆ坂に、自社スタッフの増元香さんとバナナの木の栽培の南国フルーツを使ったドリンクやスイーツの販売店を開店。フレッシュで濃厚な味わいやお

栽培の南国フルーツを使ったドリンクやスイーツの販売店を開店。フレッシュで濃厚な味わいやお

しゃれた見た目が観光客や地元客に好評を博している。現在は、12人の従業員が栽培から販売までを手がけており、長野善行取締役は「将来的に別府の美しい自然や温泉を活かした観光農園を実現し、市の発展に貢献したい」と意欲を見せる。

「信頼される農家めざしたい」

父から経営移譲 要望に応える商品を作

大阪・和泉市 西川将平さん

【大阪】代々続く農地と農園を守り、次の担い手へ受け継ぎたい」と話すのは、和泉市でトマトや水ナスなど多品目野菜を約2畝で生産する「にかわ農園」の西川将平さん(44)。2024年に父の光一さん(65)から経営移譲を受け、園主として2年目を迎えている。



西川光一さん(右)と将平さん

同農園の信条は、相手の要望に応える品づくり。御先からの注文をも

とに生産計画を立て、出荷量や品質などを調整し、取引先の期待に応えることで、信頼関係を築いてきた。大阪を中心に展開する飲食店「がんこ」の指定農園として約20年にわたって専属契約を結び、現在も出荷を続けている。



【香川】綾川町農業委員会(笹川武義会長)は、7月9、10日、町内2小学校で2年生の児童を対象に調理実習を通じた食育活動を実施した。10日には、綾上小学校で26人の児童が地元産農産物を使った米粉ピザ、ぶどう大福、いちごミル

女性委員中心に食育活動

香川・綾川町農業委員会

小学2年生とピザづくり

クを作った。佐藤裕子委員と藤重英子委員を中心に、笹川会長ほか地元委員4人と事務局が試食するまでの体験を支援した。笹川会長の「おいしく

で一つしかないピザを作ってほしい」と説明。児童はグループに分かれ、農業委員などの助言を受けて、地元産農産物をアピールしたい」と話した。

59歳からのメロンづくり

独学で技術磨き、直売所に出荷

福岡・川崎町 久保山孝幸さん



【福岡】田川郡川崎町でメロンを栽培する久保山孝幸さん(68)＝写真＝は、農業未経験から59歳で農業を始め、今年で9年目を迎えた。

きっかけは回転ずしですすしには目もくれずメロンばかり食べていた娘たちの姿だ。こんなに好きなら自分で作って食べさせたいと栽培を決意。農業に詳しい同僚の勧めもあり、家庭菜園向き品種「ころたん」に挑戦した。

最初の1年目は甘くジューシーな果実が実ったが、翌年からは病害虫や受粉に悩まされ、予定収穫量に届かなかった。そこからは独学で土壌改良や小型ハウス導入などを試行錯誤した。

今年からはレモンメロンやマスクメロンなど新たな品種にも意欲的に挑戦。地元の直売所で8月上旬から販売している。購入者からの「甘くておいしかったよ」との声や娘たちの満足な笑顔に励まされ、「今後も楽しみながら作っていきたい」と語る。

おいしいメロンと野菜届けたい

子ども時代から一途の思い

兵庫・稲美町 井澤壮さん

【兵庫】稲美町でメロンや野菜栽培に取り組む井澤壮さん(32)＝写真＝は、両親とともに井澤農園を営んでいる。



同町は瀬戸内海に面した温暖な気候で、糖度の高さと味わいの良さや美しい網目などが特徴の「いなみ野メロン」が有名だ。

井澤さんはメロンや野菜、水稻を栽培する専業農家に育ち、小学生のころに「いつか自分で栽培したメロンをいっぱい食べたい」と思ったことが農業を志す原点となった。県立農業高校、県立農業大学校に進学し、卒業と同時に就農。父のもとで栽培技術を学び、両親とともにハウス栽培44坪、水稻60坪を営んでいる。

気候温暖化の影響もあり、水管理や温度管理などを毎年試行錯誤しながら技術向上に努める井澤さんは「自分が栽培したおいしいメロンや野菜を消費者に届け、リピーターを増やしていきたい」と語った。

農業雇用の課題解決へ連携活動宣言

農業支援窓口と人材紹介企業がタッグ

【岐阜】県のワンストップ農業支援窓口「ぎふアグリチャレンジ支援センター」は8月5日、雇用課題の解決に向けて、㈱インディードリクルーパートナーズとの連携活動を宣言した。同センターが民間企業と連携するのは初の試みだ。



宣言を行った田口センター長(右)と中橋部長(左)、堀部長

する支援③農業分野での人材活用事例の発信の3点。人材紹介サービスサイトを使い、ニーズに合わせた専門人材などを確保することが狙いだ。同センターの田口博康センター長は「都市部の多様な人材などを取り入れ、新たなモデルを構築していきたい」、同社の中橋美香部長は「これまで培ってきた知恵やノウハウを提供して課題解決に尽力したい」と意気込みを語った。立会人の堀智孝県農政部長からは「連携により課題解決が進むことを期待する」と激励の言葉があった。

農地パトロールでアブリ活躍

委員と事務局の負担軽減

【広島】北広島町農業委員会(下岡道範会長)は、農地パトロールを効率化するため、衛星画像解析データを利用したタブレット端末の現地確認アプリでの調査を始めた。

委員は「タブレットで調査する農地が写真画像で特定でき、紙地図に比べ特定しやすい。事務局に結果を報告する手間が短縮でき、負担も軽減できる」と話した。

同農委会事務局では、委員の負担軽減や事務局の事前準備や結果取りまとめ作業が軽減でき、活動が効率化すると期待している。

地方総合

各地の話題